

ハリー・ポッターと半
人半霊の少女

桜林檎

目次

プロローグ

プロローグ*入学しなさいって…

1

魂魄妖夢と賢者の石

1話*魔法界って…

—

9

プロローグ

プロローグ*入学しなさいって…

1991年8月6日。

日本のどこかに存在する幻想郷、その中にある冥界では、8月は暑い暑い夏の季節だ。ましてやこの日はよく晴れて、現在の気温は30度に近い。普通の人間なら外に出るとすぐに暑いと愚痴を漏らすであろう、そんな天気だった。

この天気の中、白玉楼の庭師である魂魄妖夢は、全身から大量の汗を流しながら剣術の練習をしていた。

それを日影の縁側に座って見守るのは、ここ、白玉楼の主、西行寺幽々子だ。団子を食べながらゆっくりと茶を飲み、従者の成長を楽しんでいるようだ。

しばらく妖夢が剣術の修行をしていると、幽々子が口を開いた。

「妖夢、ご飯の準備」

妖夢はその声を聞いて、ふう、と一息ついてから刀を仕舞い、予めポケットに入れておいたタオルで顔に付着している汗を拭いた。

「もう5時ですか？まだ明るいのに。早いものですね…」

「すっかり夏だものね。妖夢も、この暑い中お疲れ様。」

「ありがとうございます。では、着替えてから厨房に向かいます。」

妖夢は縁側から建物内に入り、自分の部屋のある方向へ歩いていった。

「そろそろ、あつちへ行って貰わないとね…」

妖夢が去るのをじっと見てから、幽々子はそう呟いた。

——これは、とある半人半霊と魔法の世界の話。

白玉楼の夕食は毎晩もの凄いものである。

何が物凄いのかというと、その量だ。

幽々子の食欲と胃の大きさはその体型からは想像できないほど凄まじいものであり、

毎日毎食巨大な机に入りきるかどうかの量の食事が出るが、これでは足りない。

この食事達を作っているのは何故か庭師の妖夢であり、妖夢は幽々子が食べている最中も料理を続ける。

5時から幽々子が食事を終えるまで、ずっと料理を続けるのだ。

現在は味噌汁をよそいながら鮭を焼いている火の火加減を見て、それと同時に半霊の方が刺し身に使う大根と魚を切っている途中である。

半人半霊の妖夢は、半人の方と半霊の方で別々の動きができるので、同時に違う作業を行うことも容易いことである。

新しくできた料理を幽々子の元へ運び、食べ終わった皿を回収しまた厨房へ足向けると、突然幽々子に話し掛けられた。

「妖夢く、話があるの。あなたの夕飯が終わったら、私の部屋に来て。」

幽々子から呼び出されることはしよっちゆうあるが、大抵は肩を揉んでほしいやらおつかいに行つてほしいやら、日常的な呼び出しだった。

しかし、今回は少し違う。

口調こそいつものものであったが、それは幽々子の真剣な目から伺うことができた。

「承知致しました、幽々子様。」

どんな話をされるんだろう、と考えながら、妖夢はまた厨房へと足を進めた。

「幽々子様、只今参りました。」

「はい、入っていいわよ。」

「失礼します。」

妖夢は襖を開けて幽々子の部屋に入った。

幽々子の部屋は至って普通の和室だ。何か特徴があるとすれば、この部屋の周りには沢山の桜が植えてあるため、障子を開ければ桜の木が目一杯に飛び込んでくることだ。

そして肝心の幽々子というと、座布団に正座し和机で頬杖をつきながらこちらを見ていた。口は笑ってはいたが、目はやはり真剣な表情だった。

妖夢は幽々子と向かい合う形で座布団に正座した。

「それで、話とは何なのでしょうか。」

少しの間沈黙が流れる。

この空間の空気が緊張で張り詰め、妖夢はごくりと唾を飲み込んだ。

「妖夢………良いニュースと悪いニュース、どちらから聞きたい？」

ニコリと笑って幽々子が訪ねた。

「…いや、いま明らかに重要な話をするムードでしたよね？もう…」

また彼女のペースに乗せられてしまった、と妖夢はため息をついた。

昔からいつもこうだった。妖夢は、普段からずつと幽々子と話をするときは必ず彼女の真意の読めない言動に翻弄されてしまうのだ。

「大事な話があるんですよね？ちゃんと真面目に話してくださいよ…」

「まあまあそう言わずに。それで、良いニュースと悪いニュース、どちらから聞きたいのかしら？」

「……じゃあ悪いニュースからお願います…。」

妖夢はご飯は嫌いなものから食べていくタイプなのね、とわけのわからないことを言っているから、幽々子は次の言葉を言うための息を吸った。亡霊の幽々子には息を吸う必要などあるのだろうか？と妖夢は少し考えたが、考えるだけ無駄だと判断した。

「妖夢、あなたはしばらくこの白玉楼から離れることになるわ。」

その言葉を聞いた途端、妖夢の頭は疑問符でいっぱいになった。

「ええと、どういうことなのでしょう？！私が幽々子様のを離れるなんて…それもしばらくー！」

「まあそんなに興奮しないで。落ち着きは大事よ？…それじゃあ良いニュースね。あな

たは学校に通うことになるわ。それも全寮制の。」

「それってつまり、学校に通うからここから離れるってことですよね…？そんなことできません！私にはこのこと幽々子様を守るという指名がむぐつ！」

言葉を言い切る前に、妖夢の口が幽々子の手によって遮られた。

「だから、興奮しないでって。これは命令よ。絶対に学校に通いなさい？妖夢。」

妖夢の口がようやく幽々子の手から開放された。

「ぶはあ…すみません、少し取り乱してしまいました…しかし、白玉楼のことはどうするのですか？第一に庭は私ではないと整えられませんし、その他にも家事がたくさん…」「ああ、そんなことを気にしていたの？ふふ、その時はその時で大丈夫よ。私は死を操れるのよ？家事くらいならそこらの優秀な亡霊に任せるわ。庭はあなたじゃないといけないけれど、帰ってきたときでいいから。庭が荒れるのは少し私も嫌だけれど、たった数年の辛抱よ。」

「そうですか…ええと、それで私はどの学校に入学するのですか？」

「ホグワーツ魔法魔術学校よ。」

魔法魔術学校と聞いて、また妖夢の頭は疑問符で埋まる。

「魔法って…私、魔力持ってませんし、そもそも何故学校に通わなければならないのでしょうか？」

「話すとき長いだけけれど…実は、魔法界っていうところで近々戦争が起こるのよねえ。死者も爆発的に増えるってことで、戦争をなるべく早めに終わらせて、もしくは起こらないようにしておいて、って何故か閻魔様に頼まれてしまったのよ。あなたなら死を操れるでしょう、ってね。でも私も戦争を収める力は持っていないわ。そこで、頼まれたからにはやるしかない、でも私はできないってことであなたに向こうに行つてほしいの。魔力なら紫がどうかしてくるから…」

「それただの押し付けですし、少し無茶すぎるとおもうのですが…まあ、とにかくやつてみます。」

無理な願いも、命令らしいのでどうにか遂行するしかない。妖夢は生まれてからずっと幽々子に仕え、そして幽々子に膨大な忠誠心を抱いていた。そのため、幽々子に仕えることが妖夢にとつての幸せであり、幽々子の幸せは妖夢にとつても幸せだった。

「もちろん、あなたの修行も兼ねているのだから、きちんと学んでらっしゃいね。」

「はい。」

「あ、忘れてた。妖夢、質問があるの。」

「ええと、何でしょうか？」

「Do you speak English?」

「…英語が使えるかどうかの確認ですか？まあ、大抵の国の言葉は話せますし、英語もも

ちろん使えますよ。」

「だったら英語で返しなさいよ。」

幽々子はそう言つてぷくーと頬を膨らませた。

そのまま少しの沈黙が流れ、とうとう幽々子がぶふつと吹き出した。

「ふふ、なんかおつかしい！」

「別に可笑しくなんかありません。話は終わりましたね？では私はもう行きますね」

「ええ、明日紫が来るからそのときにまた詳しくね！」

「承知しました。」

妖夢はそのまま礼をして、幽々子の部屋から出ていった。

学校とはどんなところなのだろうか。冥界で育てられてきた妖夢にはただ学ぶ場所ということしかわからなかった。

なんだか疲れてしまったので、今日は早く寝ることにした妖夢であった。

魂魄妖夢と賢者の石

1話*魔法界つて：

8月7日。

今日も爽やかな朝が来ました。

ひとあくびして、調理場へ向かう。

幽々子様の朝食を作らなくては：

調理場にはもう既に妖精や幽霊が何体かいた。

そういえば昨日雇うとか言ってたな：

そんなことを考えていたら、半霊がもう料理をしていた。目玉焼きを3つ完成させている。

私も早く取り掛からなくてはいけないな。

その日、私は幽々子様の好みの味を料理人全員に教えてあげた。

さらに半霊と合わせて40品作ることに成功した。

「おはよう、妖夢。」

「おはようございます、幽々子様。朝食の用意が来ています。歯磨きを済ませて来てください。」

「はい」

数分後、幽々子様が歯磨きを済ませてきた。ニカツと笑う口から見える歯は真っ白だ。

「朝食の用意が来ています。お食べになってください。」

「わお、今日は豪華ね！妖精と亡霊を雇ったおかげかしら？パクパク…でも私好みのむしゃむしゃ…味付けになっているってことは、バクバク…妖夢も作ってくれたって事かしら？ガツガツ…」

「そうですけど…幽々子様、口に食べ物を入れながら喋るのはお止めになってください。」

「おいしかったわ♪御馳走様♪」

幽々子様は空いたお皿を自分で片付ける。そういうところはありがたい主だ。

「幽々子様、私は皿洗いをするので…」

「いえ、もうすぐ紫がくるわ。行く準備を済ませなさい。」

「わかりました。」

自室に入り、準備をすることになった。

鞆を用意し、中にいろいろ詰め込んでいく。

財布、ハンカチ、ちり紙、ポーチ……等だ。

いや、持ち物が乙女過ぎるか？

一通りの準備が終わったところで、楼観剣を背中に、白楼剣を腰に装備した。

「幽々子く来たわよ〜」

「紫が来たわ。上がって。」

紫さんがスキマから現れた。紫さんがスキマから出ると同時にそのスキマは消えた。

「妖夢、ホグワーツ入学だったかしら。おめでどう。」

「ありがとうございます。」

「まあ、別にいつでも入れるんだけどね。半人半霊で成長遅いから。」

幽々子様はうふふ、と笑いながら言った。

「私、11歳じゃないですしね!」

「ダンブルドアに許可とったら、特別okしてもらえたものね。」

.....

それは初耳なんですが…

「そうなんですか？」

「あら、幽々子に聞いてなかったの？」

「うふふ…じゃあ、そろそろ行きなさい。…でもその前に、紫に術を掛けて貰いなさい。」

幽々子様、今絶対話をそらしましたよね…

…ってというか、術って何ですかね？

「何の術ですか？」

「外国の言葉が日本語に聞こえて、話す言葉も自然と外国語になる術よ。使用時の on / off 切り替えも簡単。」

「物は試しよ！掛けて貰いなさい。」

幽々子様…強引過ぎます…

「はい…」

「まずは、目を閉じて…」

私は紫さんに言われた通りに目を閉じた。

紫さんの手が私の額にふれた。

その直後、私の頭の中にスイツチ…いや、違う？選択肢？のようなものが現れた。

おかしい感じだが、本当にそう感じた。

すると、紫さんの手が額から離れた。

「…よかった。無事、成功よ。」

「失敗するわけないじゃない。いつも私を支えてくれる立派な従者よ?」

「とか言いながら…幽々子、あなた息がすつごく荒いわよ?」

「き、気のせいよ、うふふ♪」

無事?成功?失敗?どういうこと?

「あ、忘れてた。妖夢、目を開いて良いわよ。」

「は、はい………とここで、成功とか失敗とかが、何ですか?」

私が訪ねると、紫さんが口を開いた。

「えーと、今妖夢にかけて術なんだけど…」

……………

「そんなに言いにくいものなんですか?」

「ええ、だって……普通の人間にかけてたら即死するくらい精神への負担が大きい術だもの……。」

「ええええええええええええええええ!! 幽々子様なんでとめてくれなかったんですか!?!」
「だつてえ…妖夢、半人半霊でしょう? だから大丈夫かなあつて…♪というか、私から紫にこの術をかけるよう頼んだのよねえ…」

「もう…私が死んだらどうするつもりですか!!…いや、私半分死んでました。」

「まあまあ、結果大丈夫だったんだからいいじゃない…」

紫さんが私と幽々子様の間に入った。

そういえば、アリスさんとの約束の時間は大丈夫でしょうか?

「確かにそうですね…では、時間も押していることですし私はそろそろ…」

「行つてらっしゃい。夕食までには帰ってくるのよ」

「スキマ、ご開通♪」

「では、行つて参ります。」

私はお辞儀をし、先の見えないスキマの中に入った。

「え?」

下から風が…いや、違う。

まさか、私……

落下中？

「きやあああああああああ！！」

半霊に乗つても落ちる。落ちる。

地球よりも強い重力がある場所へ落ちるかの様に下へ引き寄せられる。

紫さん…帰ったら覚悟しておいてくださいね…

急に目の前が明るくなると同時に、半霊が床に着いた。

「あら、少し遅かったわね。」

聞き覚えの無い声が聞こえる。

透き通つていて、綺麗な声だ。

この声の主がアリスさんだろうか。

声は、上から聞こえた。ということとは…

見上げると、金髪ストレートボブ、そして青い目の綺麗な女性がいた。

青いワンピースを着ていて、それと同じ色のカチューシャを着けている。

まるで、外国人のような人だと思う。

無表情でこちらを見つめている。

「いかにも。私がアリスよ。綺麗な女性とは、お世辞でも嬉しいわね。外国人？まあ、確かに日本の出身ではないけれど…。」

え？声に出てた？

「いいえ。出ていないわよ。」

じゃあ何で私の考えてることが分かるのか？

「魔法の一種よ。名を読心術と言う。似たもので、開心術というものもあるわ。…用途は全く違うのだけれど。」

心を読めるんですか？怖いですね…

「目を合わせないと使わないというのが欠点ねえ。」

それを聞いて私は咄嗟にアリスさんから目を背けた。

「あら、賢いのね。」

「この位出来ないよ、生きていきませんよ。…私、半分死んでますけど。」

「ふふっ。面白いことを言うのね。改めて自己紹介するわ。…私はアリス・マーガトロイド。『七色の人形遣い』と呼ばれているわ。あと、わざわざ敬語を使わなくても良いのよ。」

「そう。じゃあ、お構い無くタメ口でいくね。魂魄妖夢。白玉楼の庭士よ。」

「ありがとう。本題に移りましょう。その椅子に座って。」

「うん。」

「そうねえ…今の魔法界の状況から話すわ。」

「う、うん。」

魔法界を動かさなければならぬ私にとっては重要なところ。

「むかしむかし、あるところ…ホグワーツ魔法魔術学校にとある青年がいた。

青年は、愛を全く知らずに育っていた。そして…闇の魔術の深い深いところに手を染めた。

ホグワーツを卒業した青年は、自らヴォルデモートと名乗り、死食い人と呼ばれる集団を率いて『マグル生まれ』や『半純潔』を殺していた。

ある日、ヴォルデモートは、『闇の帝王を滅ぼす者』の情報をある死食い人から受け取った。

これは流石に焦ったヴォルデモートさん。『闇の帝王を滅ぼす者』を殺しに行ったわ。」

うーん、なんでマグル生まれと半純潔だけを？

恨みでもあるのだろうか…

ん？私ってこの場合マグルになるのか？狙われるな…

「あ、ここから先は幽々子様から聞いたよ。」

「あら、そうなの。ピンクの悪魔も用意が早いのね。」

「ピンクの悪魔って…あの球体の大食いピンクじゃなからね。幽々子様は…」

「だいたい一緒じゃない。」

「そうなの？」

二人でクスクス…と笑った。

「今から向かう先はダイアゴン横丁。魔法の道具とかが売っている店が並んでいる横丁よ。」

「そんな横丁があるんだ…どこに？」

ダイアゴン横丁など、全く聞いたことがない。

「イギリスの魔法界よ。普通『漏れ鍋』っていう店から行くんだけど、今日はここから煙突飛行で行くわ。」

また聞いたことのない言葉だ。

ぐぬぬ、なんか悔しい……

「煙突飛行って？」

するとアリスさんは人形を起こし、上に置いてあつた巾着を持ってこさせた。

「この巾着に入ってる粉、煙突飛行粉であの暖炉を煙突飛行ネットワークに繋いで、ダイ

アゴン横丁の暖炉に移動するの。」

その後、「魔法省非公認だからそんな頻繁に使えないんだけどね」と言葉を付け足した。

魔法界って何でもありだなと思いつながら、煙突飛行粉を触ってみた。

煙突飛行粉は太陽の光を受けた水のように、キラキラと光っている。

「つと、話が逸れたわね。あつちに着いたら買い物をするけれど、まずはお金を用意しなきゃいけないわ。妖夢、お金は持ってきた？」

「ア、うん。このお金じゃだめなの？」

「そうなの。魔法界には魔法界のお金があるわ。クヌート銅貨、シツクル銀貨、ガリオン金貨があつて、1シツクルは29クヌート、1ガリオンは17シツクル。魔法界って半端な数字が好きなのよね。」

うわあ覚えにくい…

「ということは、1ガリオンは493クヌートってことか…」

「そう。すごい量そして覚えにくいわ。」

「そしてそれで通る魔法界って…」

変なところに行くのかあ、とため息をつく。

「妖夢の持つてるお金を換金して、金庫に入ればお金は大丈夫ね。あとはあつちに着

「いてから説明するわ。」

アリスさんは立ち上がり、暖炉の方へ歩いて行く。私はアリスさんに着いていった。アリスさんが手を振るうと、暖炉に火がついた。

只でさえ暑いのに、暖炉の周りにはもっと暑くなった。背中から汗が滲み出てくる。

「妖夢から先に行つて。」

「う、うん…」

少し不安になる。

粉をひとつまみ、暖炉の中へ放り込んだ。

すると、赤く燃え上がっていた火は緑色へと変わった。

「目を瞑つて『ダイアゴン横丁』とはつきり言うの。はつきりね。」

私は少し躊躇ったが、勇気を出して火の中に入った。

お化け以外に、怖いものなどあんまり無い!!

火の中には不思議と熱くなかった。

「ダイアゴン横丁ツ!!」

そう言った途端に、自分の体がぐるぐると回るのを感じた。